（遞信省認可）

いらつめ

揭載要目

猫（懸賞文藝）

流行一二

最良齒みがき

幕府時代の奥女中

樹翠陰史の言文一致論

韻文二三

當世文學者の出生地

明治二十三年十一月二十日發兌

第七十四号

一冊貳錢五厘

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第七十四号目次（明治卅三年十一月廿日）

猫（懸賞韻文及散文）
日本音樂史稿（五）……準縄子
流行一二（髪形、半えり、簪、ショール、羽おり、紙入、指環、パナン）
木炭製最良歯みがき製法
鳥獸肉烹熟時間
幕府時代の奥女中（一）……天保老女
劇毒目口に近づく
歐長からず（韻文）……さもり
朧月子大人の秋夜野行にならひて（韻文）……撫箏女史
桂川鵜飼の圖（韻文）……美妙
虫二十首外三首……撫箏女史
日本文華の岸上質軒氏へ……樹翠陰史
うづらごろもの作者
高等教育を受けた婦人と嫁入りさき
女學生の下宿
女學校で外國語を教ふる可否
審査以外の譯
當世文學者の生き地
オツカナイ
東京流行の帽子
湖處子の「歸省」

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢〇並別製共前金領收の上で無くては差上げぬ事〇府内に限り無郵税〇毎月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局をある處に神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵券代用に郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割増しなれは妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第六十八號至第七十七號十部版權所有
明治卅三年十一月十九日印刷　明治卅三年十一月廿日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本鑑之進
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

〇懸賞文藝新題

〇第卅二回題（何でもよし）
右　新婚旅行の人に贈る……十一月十日〆切
〇第卅三回題（唱歌文章に限る）
右　小春日和……十一月廿日〆切
〇第卅四回題（何でもよし）
右　馬蔭れ獼猴……十二月十日〆切
〇第卅五回題（何でもよし）
右　春衣裁縫……十二月廿日〆切
〇第卅六回題（何でもよし）
右　人に半襟と送る……一月十日〆切
〇第卅七回題（唱歌文章に限る）
右　無言の愛情……一月廿日〆切
〇第卅八回題（何でもよし）
右　嬉しいもの何でも三つ……二月十日〆切

賞品も菊水摸様の金又は銀杯

右賞品は一等賞の者、二等三度の者、三等六度れ者、四等十八度れ者及び是と同じ資格に相當する者に限り進呈します。〇賞が重なつて數よ充ちた人は其賞と受けた題と詳細にしるして賞品を御請求なさい。

第三十一回懸賞文藝應募得點

○唱歌

題　猫

（イ）　撫箏女史（ミノ）

けふあるらしく求めつゝ　友とぞめづる文机よ
りめとぐ汝のいとはしや。　いざもれ見せてくれんづと
いかりの聲もあらゝかに　こらせど猫はひれふしつ
いと悔いがほに見えにけり。　いかりは恐やう〳〵に
をさまりければひざの上　やすくねむる其樣は
ひとしほあはれまさるなり。　あはれ世にいふ柔はよく
剛制すてふことゝざも　げに詐にあらずかし。

（ロ）　つらき（スヘソ）

日の影に連れてぞ變る猫の目の◎　朝ひるゆふべくれ六時の◎
やゝよかゞやく青貝や△　黄班は水夫のひざまくら△
ねむるそうその沖の面に◎　あさる漁夫の籠のくち◎
聞き耳たてゝ△　ねらひすまして△
みじかき鼻にかぐかとり◎　得しも言はれぬあまぐさき◎
麥味噌汁の香出しあべ△　蓋をし取らば虫も出ん△
竈はあとじろれ蜘蛛の巣は◎　灰にまみれし絹のいろ◎
毛なみやさしくなで聲も△　長者の愛めかゝりきや△
おのれにおとる貧れかみ◎　餌をのこさず育むしり◎
ともる油をともすつめ△　ゑば見てかくそわァがつめ△
ねづれするどきくらべ見む◎　生死ともよくらべ見む◎
寐ればしとねの上にも飾△　起きても足に土つけで△
日ゝ日にこえる肉食に◎　釣られて罠にかゝりもし◎
墓石ともよ　水夫の榮もこれぞかし△
虎よもまゝじのこるかは◎　三味は諸音は誰がためか◎！
粟飯片食やせつかれ△　死なば苦むす卒塔婆のげ△
わづかに飾ぶる樣はなに？◎　わづゝにねぶる樣ゝあよ？◎

（ハ）　横山ひろ（カヒガ）

まゆく時なくとぎなけし　爪をかくして人にこび
やさしく見せて膝下に　もたれかゝりし猫の子ぞ
あはれよもまゝなおそろしゝ。
まあこそまろく爪とがり　牙はそるどく尾は長く
威ありてたけき其樣は　自由な風とよびおこす
虎れかたちよさもにたり。　とらを畫くばなかく〳〵に
猫にゝるこそむべありけれ。

以上三曲無賞

（ニ）　十八居士（ヤマト）

あの君がやさしき目元　とり〴〵に色かはるこそ
あかくに愛らしくまた　嬉しけれやさしきことに
そぐれたる聲音は人も　およばねば羨しさの
あまりにやなかきの中に　毒あれば遠ざけよなど

いふもげに愚かなれ。

水野ひで(オホサカ)

(ホ)

絹のしとねよ魚の肉
いきてひくひんそべよりも
深きめぐみや君れ恩
死しておくれよある皮を。

奥野やす(サカヒ)

(ヘ)

さても幸ある此小猫
間近く行きて戯れつ
膝と褥よねむりつゝ
鼠を捕りてはこりごりや
朝に猛き將軍の
夕に若き手弱女の
爲す業とても荒れ廻る
榮華よ日をぞおくるある
さても幸なる此小猫。

以上三曲第四等賞

ひさこつ(イヘキ)

(ト)

鼠をとらねおこたりも
猫のとがぞといふなかれ、
糺さばとがの人ふあり。
肉をぬすめる其罪も
肉にあらせし其元と

蘆野潤三郎(イヘシロ)

(チ)

猫よ眠れ我いとし子よ
汝がのなく聲に驚きやせん。
遊びつかれて荘子の胡蝶
寐ざめも近しかァあいがりし
猫よ起きよ我いとし子の
汝がこゑあくびむつかりやせん。
猫よ遊べ戯れなそべ
乳房はあれてはゝゑみやせん。
手まりに紐に我いとし子は

本吉しほ(カガ)

(リ)

鼠れゑものならざれど
そうあをとめの膝れ上を
めでつあでつゝもてなされ
家富み榮もさきてひの
さるを同しきてらからの
わかで世を經るやせ猫は
おのが身にさへ覺もらん。
猫さへ受くる幸不幸。
魚のあつものあきはて、
おのが褥を打ふして
月日嬉しく過ぎ行くは
猫におよべる惠こあれ。
けよもる飯のあてれにも
まづしき家のはかなさを
うれ世のつあにかゝりては
春れ日影の長閑さに
夜毎の戀やうのるらん。
鼻はす猫のすがたこそ
眠りやもらんなきなうす
ちからあげ首るしのべて、
やつれ〳〵てとかしけれ。

以上三曲第三等賞

○文章

(イ)

何處に取り所があッて愛されるのでしやう? 猫、鋭い恐ろしい爪と持てゐる。 其を常には藏して見はさぬ所が徳よ誇らぬ君子れ風を備へて居る樣なと云ふ故か? 人無い時は直ぐ厨の肴を盗む。 が、家人の前では哀れげに目を細く

奥野やす(サカヒ)

して溫順しくしてゐる所が盜人の午睡てふ風に能く似てゐる故の? まさか……兎も角猫には別に之といふ取り所がない。唯折々鼠を捕るのが彼の特性、が鼠を驅らせる目的で猫を畜てゐる者は恐らく十中の二三も……大抵は花の令孃が徒然のお相手に……或時は辱くもキッスを與へられることもあります。 あゝ猫はどんな宜い月の下に產れたのでしやう? 同じ家畜とは言へ牛馬や犬とも霄壤の……併し身に餘ッた幸福を受くるだけ未來では花の巷に流されて現世で積んだ罪業を同じ群の浮れ女に搔き鳴らされる因果應報、あれ又數の免かれぬ所です。

(ロ)　十八居士(トヤこ)

「おいちよ！ ちよろけ！ ちよろけよ！ おいち！ あ、お母さん、おいちを何處へ行きました?」

「おいちかへ? 今までそこにゐたが……おいち！ おいち！」

ニャチ〱とやさしくなきて走り來るは未だ母の胎內より出てから五十日も經りまいと思ふほどな三毛の尤物です。小兒は喜んですぐに捕へて膝は上にのせ、項より尾まで柔かにさすりながら、

「いゝ子だ！ おまへは私の友達だ！ 一處に學校へ行かう? いや? かぶりを振ッてるね。 おやア承知? 私の膝は上にゐて先生に習ふんだよ。 授業がすんだら私と遊ぶんだよ。 おにして遊ばう? 球? よからう遊びがいやになッたら又さらへだ。 おまへが忘れたことは私が敎へてあげるよ。 おまへはほんとに賢いよ！ お母さん何んにいゝ、猫でもね。 私は明日から一處に學校へ行きますよ！」

以上二章無賞

(ハ)　撫箏女史(ミこ)

あやめもわかぬ闇室、兩眼炯々あたりもまばゆきばかり、碌々疊をならして利爪を研ぐ。 あゝ凄じ！

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

世人はわれらの爪をとぐを厭ふ。 されどわれらは皆爪を以て食を覓め、爪を以て敵を追ふ。 もし爪なかりせば飢餓立ちどころに至り、强敵しきりに逼りつべし。 されば己れられ爪をとぐ豈怪しむべきことぞうは。 さてわれど爪牙をとぐもの世上獨りわれらのみにはあらざるぞかし。 小さきものは姑く言はぞ、かれ猛獅を見よ！ 又かれ悍鷲を見よ！ ゑあもそらの体軀小なるを侮り、つねにわれらに向ッて嘲嗤を逞うせんとするにあらずや。 あゝわが同族！ 起よ〱！ 吸るものは勝ち劣るものは敗る。 あれ宇宙間自然の眞理なるぞかし。 治にゐて亂を忘れざるこれわが族の當に服膺すべき箴石なるぞうし。

(ニ)　竹下山人(フシマ)

孟母が斷機の敎とはゝ似寄ッた猫は誠、これは私の十才

の時でした。 或日の事私ハ一生懸命に本を讀んでをりますと私の父がいつの間よかそッと後の方よ參ッて見て居りました。 さて私がふりかへりますと忽ちにこやかなお顔をして私ハ頭を撫でました。 で、私も直に聲をうけました。

「お父さん御覽なさいもう十二枚讀みましたよ。」

「ぬむそれは大層讀めた。 併しおまへ矜ッちやいけないよ。」

「なせですお父さん。」

「なせッて猫が鼠を捕ッてほこるやうなものだらうさ。 そんな自分の躰を肥すためばかりの事、少しも矜ることはない。」

「でもお父さん皆が猫をほめますよ……鼠を捕ると……」

「それハ褒めてもよいが併しほめられたがることそれないといふことよッ。」

父は私の顔を見つめて居りましたがやがて戸の外に立ち去りました。 後で私ハ自問自答どういふ譯かと考へました。が、兎角滿足な答が得られないのでそのまゝ過しました。 併しいつとなく其意が譯りました。 實よ山陽先生の狗猫の説なぞと思ひ合せますと猫ハ兎に角世の人の猫よ似て居るものがいまそしいです。 常には鏡のやうな目を柔かに眠り、いつも大鷲のやうな爪をやさしく包むのは何の爲でしやう……でも奸臣とはよくいふたものです。

（ホ）

芮園居士（フツシマ）

「お姉さんあの赤兒ハ？」

「赤兒？ 赤兒は死…死んだのでそよ。 だからねお前今から負されないよ。」

「死んだッて何？ エーッテ。」

「死んだッてのは遠方へ行ッてしまッたことだよ。」

「何時歸ッて來るの？」

あゝこの意地わるさ。

「もう歸らないのだよ—墓場に埋ッたから」

女の子とて赤兒を負はれないとてさめ〴〵泣き出しました。

「清や御泣きでないよ……猫を……清や……赤兒の代りに。」

今まで泣きし顔も晴れ、喜びて猫を負ひ、二足三足門を出づるや否や、

「あらお姉さん猫が……」

高聲よ叫ぶ。

「猫が何？……」

「背よ爪立てゝ……」

「よくない猫だ……清やお許しよ。 猫を叱るから。」

益々叫ぶ小供を慰めかねし人……泣かされども腹ハ中はかへッてくるしいでしやう。

（へ）

花翆（トウケイ）

六疊の新座敷、一間の床間、南向の長廊下、日和よ眼も

暗む計りに透る、此れ誰の住家か。　言はでも知るべき豪商の別莊。　其椽先に投出し在るハ唐草好ミの羽二重織の褥。今しも主なく獨りさみしさうな面趣。

突然次の間より顯はれたのハ確かに二八……形容ハ蛇足、不思議さうな目つきで褥に眸をこらしました。

「君や……君や……お前玉を知らないか。　一寸さがして來てくれ。」

言ひ放ちました。　次の間で「はい」と荅聲、間もなく玉は此座敷へ御入來。

「おや居たね早く御出で。」

と猫を抱き込んで嬉しさうな面付で今度ハ猫との會話。

「お前の御布團がね温かになッてゐるよ。　おとなしくこゝにねんねしてお居で。　おんもへ出るとわんわんに喰ひつかれると不可ませんよ。」

と猫をバ件の褥の上に寐ころがせしきりに御說法。　猫ハのんどを鳴らしてしきりに喜ぶ。　終りは猫のねんねこ歌、さればその褥の主人公は玉とやら呼ぶ一匹の猫。

「この畜生めそこにゐやアがるか。　シーッ、シーッ」

「やい早く棒を以て來い。　この畜生め。」

「シーッ、シーッ、殺して仕まへ。」

　五六名の小童等が塀の上に寐てゐる猫を責る所で、其内一名が猫を目がけて一片の石を……哀れ的中、猫ハ驚き飛び下りました。　が、之につけ入る兒將隊の追擊、猫も今ハ必死です。　ふと傍の家の戸隙が三四寸在るを見かけて、これぞ屈竟の逃路、天の賜物と一足飛びに逃げ込みました。

此家の下婢らしい者が今坐敷を掃除してゐる所で此を見ると忽ち箒を逆さまに持ちかへました。

「又來やアがッたか。　ひとが奇麗に掃除して置くと泥足で上ッて來ていつも〱妾しが旦那に御小言頂戴。　さア出て行かないか」

と一擊こつり。

　嗚呼運命ばかりは爭はれぬもの。　おなじ感能を供へながら玉は極樂、無名猫ハ地獄とは。　されバ物事ハ何もかも運命かしらん。　妾が現在の境遇も……！」

（ト）　　後樂散士（ナガ）

「おや此處に奇麗な猫が寐て居りますが御宅のですか。」

「えゝ宅ので御座いますがどうもいたづらをして困ります」

「一寸抱いて見ましやう。　おや肥ッて居りますとねエ。」

「あなた毛が拔ケて着物をだいなしに致しますからおよし遊ばせ。　そして美しいあなたの御顏が汚れますわ。」　猫を抱く

「あなたハ不思議なことを仰せですことねエ。

と顔が汚れるッて……何を顔が汚れませうか。」
「はゝゝ御承知がなければこそいふのですよ。」
「えゝ存じませんから何ぞ御敎へ遊ばして……」
「はゝゝ戯言で御座いますよ。　唯ねェあなたはお美しい御顔を見る人が猫を比較に評しはしないかと云ふことなのですよ。」

以上五章第四等賞　水野秀（大坂）

（十）

「姉さん秋季皇靈祭といふ大祭日だけあッて賑かですね。」
「薄情な大坂でも盆彼岸には亡き人を追慕する孝子貞女とあるのでしやう。　このやうに參詣のたえないのを見ては。」
「それこそ兎も角宏大の建物―立派ですねェ。」
「立派といへばこの猫をおらんなさい。」
「おや猫ですか……猫は……魔物と嫌ひしにどうも合点が行きませんよ。」
「それは尤もの不審、これにも寓意のあることでせう。」
「姉さんどうぞ後學の爲めに寓意の一條を……」
「おはゝゝ秀子さん眞面目ですねェ。　人まねをしてはいけませんよ。」
「早く御聞かせ下さい。」
「さういそがずともお話しいたしますよ。　天王寺の伽藍建立についても名ある工匠の集へることとて伏見より左甚五郎が來まして腕くらべの上棟梁とありました。」
「あ、その人こそ唱歌集の飛彈の工匠ですか。」
「それは後にして棟梁はあの寶塔建立には殊更に苦心に苦心を重ねて遂に大國柱を浮かし四方の柱にて支へしむるの工夫を以て千年の今日びくともせぬ大丈夫なる建築をしたのです。　そしてあの彫刻物なぞ又佛に擬ひ一刀三拜苦心焦思の結果で、外國も東洋の美術に富めりと驚嘆したと申す事でせう。あの彫刻物と鳥に巣くされ、鼠に嚙られぬやう……あゝにあの飛びかゝらんとする猫を刻みしとの話しです。」
「隨分面白い譯です。　が、姉さんあれ猫……」
「猫とは何故？」
「にやわん／＼と嘆きませうよ。　おはゝゝ」
「おやまアいやな秀子……外に理由があると考へるのですか？」
「甚五郎とやらもなんでも權謀家と兼ねてゐるかと思ひますよ。」

（十一）

芮園居士（レフコ）

「おい君待ち玉へ。　どうも歩けない。　ひどい風だ。」
「サッさと來たまへ。　大丈夫が風を恐れてをらるゝもんか……猫でありやしない。」
「何？　猫？　猫がどうたッて……」

「知らないか？　風強而猫悲矣といふぢやないか。」
「洒落いふな。そんな根なしがあるもんか。馬鹿々々しい。」
「根なしぢやない。君は譯をしらないんだ。」
「それぢやどういふ譯だ？」
「一休風が吹けば塵がたつだらう。塵がたてば人にどんな害がある？」
「はゝ開發的敎授か？　よし生徒にならう。塵がたてば眼を害するのさ。」
「眼を害すれば其極盲に？」
「盲さ……」
「盲になツた人をどうする？」
「はゝわかツた。三味線の需用が増すといふのう。はゝゝ」
「はゝゝゝ」

（×）　ひさこつ（イヘシロ）

「あらいやよ玉は。ほんたうにいやだ。折角姉さんから貰ツた形で縫ツた鼠をくはへたりなにかしていつでも〳〵……其のくせこなひだなどは妾の御雛箱をかぢツたやんとの鼠があッても知らないふりしてゐながら……妾が何かして遊ばうと思ふときッと何……なんていふやうな顔していつでも邪摩ばかりするんだもの……あらまたいやだよ玉……ねゝお母さん……」
「おはゝゝまた始まツたおききれ。なんだねェ小ひさな猫なんぞ相手にして……おはゝゝ」
「だッてお母さん。折角あそばうと思ふとまぜッかへしばかりするんだもの……妾くやしいわ……」
「おやゝゝそんなにくやしいならもう玉は叔母さんとこへやッておしまいな。」
「でもねェお母さんおとなしくころ〳〵してゐる時を思ふと可愛くッてよ。」

以上三章第三等賞

日本音樂史稿（五）　準纚子

踏歌

踏歌は源氏物語初音卷に花鳥余情を引きて正月十六日の節會をは女踏歌といふ。舞妓進み出る故なり。男踏歌と十四日にあり。これ中古五節の後に少年童女に命ぜられて踏歌せしより事起れり云々　天武天皇三年正月朔大極殿に詔して男女の別なく闇夜に踏歌すと。また持統紀七年春正月辛卯朔丙午云々是日漢人等踏歌を奏す云々　又夕其人數は延喜中宮式に妓女四十六人など見えたれど其盛なると想ひ見るべし。仁和五年正月十四　踏歌記に踏歌と稱するものは新年の祝詞累代は遺美なり、歌頌には實作を延ぶるは意と以てす云々　また此歌曲の終

にハ必す萬年阿良禮と重稱する由、今改て萬歲樂と云ふ。
天平十四年正月壬戌天皇御二大安殿一宴二群臣一酒酣奏二五節田舞一訖更令下少年童女一踏歌上又賜二宴天下有位人並諸司史生一於レ是六位以下人鼓琴歌曰

新年始邇阿久志社供奉良米萬代摩提丹延暦十四年正月乙酉宴二侍臣一奏二踏歌一曰

山城顯樂舊來傳　帝宅新成最可怜
郊野通平千里望　山河擅レ美四週連（一本作星）
新京樂土萬年春　冲襟口春（一本作眷）八方中
不日爰開億載宮　壯麗裁レ規傳不朽
平安作号驗無窮　新年樂平安　樂土萬年春
新年正月北辰來　滿宇昭光幾處開
麗質佳人伴春色　分行連袂舞皇垓
新年樂平安　樂土萬年春　昇高詠澤洽歡情
中外含和滿頌聲　今日新京太平樂
年々長奉我皇庭　新京樂

とあり類聚國史。　弘仁以後專行二女踏歌一而男踏歌不二復行一（大日本史）
宇多帝寬平元年復レ之敕參議橘廣相撰踏歌記略云踏歌者（中略）豈啻縱遊樂於二管絃一惜時節於風景而已哉宜依二承和故實一以爲二每歲長規一村上帝天暦九年女踏歌を停め、冷泉帝安和二年之を復す。圓融帝永觀元年男踏歌を行ひ、後ち又た廢す（河海鈔 三）條帝長和中女踏歌を停め、後一條帝寬仁元年舊に復す（年中行事鈔）

小墾田舞

小墾田舞也釋日本紀に曰彙方掖之小墾田宮之朝（推古帝）所制之樂故名とあり。　又天武天皇紀十二年正月丙午奏二小墾田舞一及高麗新羅百濟三國樂於二庭中一とあり。　重に夜遊に用ゐらる。

歌垣

此の樂ハ男女並行にて歌ひ、終に亂舞にある、之れ聖武天皇天平六二月癸巳朔天皇御二朱雀門一覽二歌垣一男女二百四十余人五品以上有二風流一者皆交二親其中一正四位下長田王從四位下栗栖王門部王從五位下野中王等爲レ頭以二本末一唱和盛大想ふへし。　之れ一の遊樂あり。　また寶龜二年（一本元年三月に作る）辛己れ文に曰く葛井船津文武生藏六氏の男女二百三十人供二奉歌垣一其服並着二靑摺細布衣一垂二紅長紐一男女並行徐進歌曰

をとめらにをとこたちそひふミならす
よしのみやこは萬代のミや

次の歌垣と曰く

ふちもせも淸くさやけしはかたゞは
千とせをまちてすめる河かも

每歌曲折擧レ袂爲節其余四首並是古詩なり。　不二復煩載一初めに西方より男女進ミて歌を擧て舞ひ、其袂と襲を節として左右に立并び聲の全音に拍を助くるを歌垣といゐ。　其二三の曲名と擧くれハ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

難波曲　　淺茅原曲　　倭部曲
廣瀬曲　　八裳刺曲

筑紫舞

職員令集解ニ筑紫舞廿人諸縣師一人舞人十人八人著レ甲持レ刀二人禁止歌師四人二人大歌笛師二人兼ニ知横笛尺八一とみえたり。

此舞絶て今ハ無と云へり。

諸縣舞

此舞ハ日向國諸縣郡より出しと云ふ。之と朝延にて用ゐ給ひしとハ諸書に散出して有れ共舞形傳記等詳ならず。

五節舞

此舞ハ天武帝嘗御吉野宮彈レ琴適有神女降應曲而舞翻袖五節帝因制此舞者十六人と令義解に見えたり。大嘗新嘗幷に之を奏す。

倭舞

倭舞本出於大和故名焉凡大嘗會舞者歌人各十人著ニ青摺衣一執ニ賢木技一鎭魂祭簡点侍從内舍人大舍人各四人爲舞者諸社祭祀亦奏之延喜式其の歌ハ宮人の曲を用ゐる由體源抄

飛彈舞

飛彈樂ハ飛彈國の風俗なり續日本記聖武天皇十二年癸丑朔中略奏ニ新羅樂飛彈樂一となりたり。

流行一二

髪も若いところで不思議ニ唐人髷がおびたゞしく、丸髷に爲ッて根上りの丸形の大流行、中ニはをかしい程根上りなのも有ります。

半襟のうち一二の變り柄ハ白茶の一樂へ黒書で疎畫を書いたもの。但し畫ハ四條風。

簪には玉付きの大した廢れ方。一般ニ言へば上等ハ簪しとば一般にさゝぬ方。これハ掏摸のこといからとの事。

羽織りに至つてハいらつめ方にさへ書生羽織の大流行。甚しいのは袴引きずりと爲りさうな程。

紙入れにハいらつめ持ちニ絹ハンケチ製の一寸流行。これは柄のちがッた絹ハンケチを二三枚とり合わせて縫ッたもの。

シヨール即ち肩掛けハ上等カシミーア位なところより外ハあまり流行らず、吾々が曾てゐるく言つた毛糸製ハ今日既に地をはらひました。

指環ニは何の故か金の十八金が不思議な流行、その中にも滿鉾形でホリキザミ抔の無いのが一入でそ。

パナンも指環と同様ノベモノの流行、ホリキザミも無粹と言ふれる方。

木炭製最良齒みがき製法

齒みがきに適當なのは木炭か硼砂に限るれです。是ならばよく齒の汚れを去り、そして更に齒の害とは爲りません。西洋でレプイス　パール（淑女の眞珠）と異名するのは即ち此齒みがきです。其製法ハ下のとほり、

木炭ハ何の木の炭でも大抵よろしく、それを出來るだけ細かくして絹篩で濾し、其粉二オンスに白砂糖二オンスを交せ、丁子油六滴を加へ、煉り交せると一つの膏藥のやうな物が出來ます。之をブラシへ付けて齒をみがくのです。炭で齒をみがくのも一寸聞くと變ですが、實際用ゐて見れバ其効能も別かります。

鳥獸肉烹熟時間

やはらかい物ならバ煮える時間も直ぐなりますが、で無いものだと一寸迷ひます。ことにも煮え過ぎていけず又煮え足らずでいけぬのはよく有る事で、左の時間表を心得て調理をするのも大に便利だと覺えることです。

羊肉——重量八ポンドの肢肉ならバ二時間半、七ポンドの肩肉ならバ一時間半、七ポンドの首肉及び胸肉は一時間と四十五分。

牛肉——十五ポンドの背肉ハ三時間半、廿ポンドの肋肉と三時間。

小羊肉——八ポンドの臀肉は二時間、五ポンドの足肉は一時間半、肩肉胸肉は一時間、

七面鳥——老鳥ならバ三時間、幼鳥ならバ一時間。

にはとり——老鳥ハ一時間半、幼鳥と一時間と十五分。

鵞鳥——二時間。

青鵞鳥——四十分。

家鴨——一時間半。

鴨、鶉、鳩——二時間。

幕府時代の奥女中（一）　天保老女

舊幕時代の奥女中制禁心得等も今日から見て一つの身だしなみに爲ります。まづ新に召し抱へる人が有れば其人に向つて左の心得を言ひわたしました。

御召抱人支配女より心得申渡しの事（原文のまゝ）

一　御家法をはり相心得申候の事。

一　唯今まで他の御殿相勤居候振合ふつとめ申間敷、尤も他御殿に比べ申ましく候事。

一　言葉づかひの事、附り忌言葉の事。

一 御役割の外一切手出申間敷候事。

一 諸見世物、娼家、俳優の事申すまじく候事。

一 行儀見ならひ申すやう申わたしの事。

一 同勤一和いたし候やう申渡しの事。

一 衣服身でしらへとう百五十日の中に御定めに改め申候やう堅く申渡しの事。

一 惣女中とも御番相勤めるうちは一切局へは立より申まじく、又着替いとも部屋へまゐり候事當番の心得方にはこれなく候事。

一 御番相勤候内は少しも御用欠申さぬやう一統つね〴〵心得申べく候事。

一 手水場着替には元より建築れ候儀にて部屋へ立越し申す筋は平御奉公人に於ては猶更有るまじく候尤も着替の時刻より末女より部屋〴〵へ申し通じ着替所へ持參り候やう致すべく、又女共着替持參着替所へ參り居る人々主人の着替いたさせ、引取申すべきやう、それ〴〵申渡し置るべく候事。

この心得れ言ひわたし濟んでそれから當番女中の刻限と言ひとたすのです。

（つゞく）

劇毒目口に近づく

壁紙、書翰紙、織物等よ鮮麗きはまる色を附けるためいりか其製造所は知らず〴〵劇毒の砒石、アルミナなどを取り用ゐるに至ッた事、誠に慨はしい至りです。近頃なる處に小兒の有り、俄に中毒して死んだ處で、段々と其子細を正しゝ處肌襦袢の木綿は目も覺めるやうな綠色で、小兒の全体よ汗の出たため其綠色の浮き出し肌からそれを吸収しく終に非常ゐ至ッたと丸事です。心得て居くべ丸事です。

歌なぞゝらず

さゆり

たかさおのうたなぞふらず、
にひまくら眞紅の濃きも
解け過ぎて褪むる日もあり。
其むかししたひしゆふも
けふはさてさほどにも無く
よその花またうやまるゝ。

いひかはすその、そのはじめ、
かずかずれいさごと分けて
眞珠をしひろひしならば……

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

うち　とけし　こゝろ　の　そこ　に
たへ　しのぶ　ところ　も　あらば……
然らざれば　こそ　この　すがた。

朧月子大人の秋夜野行にならひて　撫箏女史

月まつ虫にさそはれて　にしきなき萩分け入れば。
そでにあまりて香もふかく　くつろぐ尾花さまもかし。

桂川鵜飼の圖　美妙

淵瀬のまゝみ世をわたる　たつきあらせれかつら人
仇には爲さじ夏のよれ　夏の夜のつき影。

美妙大人の「露二十首」にならひて
虫二十首　撫箏女史

さよふけて艸の葉末のつゆしろく人まつ虫の聲のみそそむ
さなきだは哀もふかき秋の夜は鳴く虫の音もかれはそりけり
秋の野におく白つゆの玉まくらなど虫はせでなきあかすらん
咲萩の錦のふすまかさねつゝつゞりさせてふきり〴〵すなく
夕ざればかきなす琴につけつゝもふり出でゝ鳴くすゞ虫の聲
月かけのさゆるくさむに虫ぞなく露のしら玉ふみくだきつゝ
くさむらにうたふ虫こそ哀れなれ露よりもろき我身としらで
身のうさを月にぞ暫し忘れしを呼びおこしけり虫のこゑ〴〵
秋の野にしげる錦のいろ〳〵ははたおりむしやをり出しけん
とどろかぬわが心まろかひなければ秋きぬとつくる虫音に
よもすがら鳴きあかしける虫の音も我思ひといづれまされる
つゆ分てえらぶ人もやありぬらん夕すゞむしの聲絶えにけり
きり〴〵すいたくなゝきそ秋の夜のうき心ねは我ぞまされる
あうつきの枕に近く聞ゆなりあはれにかれしこほろぎのこゑ
訪ふ人のなき賤が家も秋さればつゆをやどりに虫の鳴くなり
たがために啼きゝりすらん松虫や過ぎぬる人も絶えし夜更に
哀れなるきはみなるらめ秋の暮の夜更におけるむしの聲こそ
虫の聲今をさがのゝ月の夜半みだるゝつゆにあざむかれけり
衣うつ音もいつしか絶えはてゝ虫のこゑこそひとりすみけれ
草ふかき野へわけ入れば露さへも亂れとびつゝ虫と見えけり

悲しきもの　仝上

村時雨ふるさとしたぬまよ中に聲さへしきるかりのひとつら

病のとこにて　仝上

つね〴〵はありもおぼえぬ鐘の聲など今宵のみかく哀れなる

木曾川のほとりに月をみ、
家にかへりてよめる　仝上

見ても猶見まくほしけれ眞帆ひきて舟きそ川の月夜げしきを

日本の文華賀軒居士に御答

山口 樹翠陰史

前置が長いとしかられましたで略して置いて。さて。早蕨点や雨滴点は是迄日本になかつたとの御小言、それで將來日本は文章につかつてならぬとの御示しか。もしそれなら。居士は、昔は日本になかつたランプの光りで讀書はなさらぬ事でしよう?言語そのまゝを平坦に紙面に寫す。それ計りでは、音聲の抑揚、を示して、正當な看念を、讀者に得さする事に不得手な譯。それらに適當な符号を用ゐたとて、言文一致流の人が苦んだと云ふ程もありません。此等種々の符号標点は矢張文格語調の助け、從つて談話に近い所以です。

引續いて私が先の文章の中から、嘆甚に係る句と拔いて「操返しくりかへし」と、その重複をそしらぬばかりに仰しやつた。成程一應御尤もらいし事、しかしそれは言分もあります。

元來私の彼の文章は。漢文者流の唱道する文の組織の体容にのみこじ付けて、こしらへたものでなくて。居士の御論の服せぬまゝを、その複雜な順を追ふて辨した次第。從つて重複な語句があつたかもしれません。が、皮相な看察で論の正体をとり逃さぬ樣注意して。あら〳〵大網で漏さず駁し、そしてその中とこな〳〵に論じ碎きそれで相對照して見れば理を人に得易いと云ふ鳥渡した考から草した文章。それにならぬて、この度もまだ片ッ端から殘さず辨駁いたすつもり。よく我を狂けて、理は書生にでも採らねばなりません。決して顔とをしんで、門閥癖の余流になつむのでありません!

簡潔明瞭聞き古びた御示し、所謂簡潔の簡な所は別に註釋解譯を數多く要せるが所詮でもありますまい。俗耳に遠さかるのが明瞭の得たる所でもありますまい。「耳」に就いての御驚きも迂い人なら至當な事。續いて私の文章の中からまた御四五句をぬき出して、それが言文一致の本体で、痛快、繊麗、眞摯な處かとの御尋ね。その本体かと今更の樣に御尋ねなさるは一「もがな」の語にでも御係りのでもか?成程古文に多く見る語、むかし文体散漫の機に乘じた姦傑の所爲と御認めなさつた、言文一致体をでも、折角御研究なさるとならば、東京に多く先達が居ます。それへ就いて御尋ねなさい。痛快、繊麗、眞摯な處がどうして我々の鎖末な論になりましよう。むかし、その痛快、繊麗、眞摯は古代にあつて古文にはなりました。が、すでに言語文章共進化して今日、なほ古体の文章を綴つて、それで痛快、繊麗、眞摯の味を得たとおもてるゝのは、所謂獨善自足でして、誰を求めて其眞味と御すゝめなさるか?つまり隔靴の憾みに嘲まるゝ制裁です。一体これらは料理人は手の內になる事其手際を持ちながら、文体と頑然古雅に倣らはせて、口に合はぬそしりをわざ〳〵おもとめなさるはれ爲に取れぬ所です。

それでともかく一体いらつめ紙上の論は、質問らしい口上やら泣言やらを打ち交せて畢竟先の居士の、御論と辨駁いたした積り。あら〳〵駁し終れば、まだ論はあつても詳細まではいらぬ事として止めました、止めるも論を取り消すのでなくてその進行を止めたのですテ。

それから批評辨駁の仕方の御示し、あれも一々承知しました。が、種々の文体を試みて講究の材料に供せると決して缺くべからぬならば、言文一致派が獨り機に乘じた姦傑でもあるまいし。談話と文章と遠さかつていけぬものなら談話の面と文章の面と似寄るべき必要はそこにあります。文体は散漫無体をいたはれば一致統合の方法を講究せねばなり升まい。

それを終に語調句格の定律を失ふ事に御氣こつかず、種々雑多おもひ〳〵の文章を書き試みよと云はるゝので。そこに論理は入り亂れてどうか斯うか見定められぬ、それが氣の毒でおもはず老成の御方に向つて言過した所は平に御用捨。れも文學は爲でもから!

哲學者とやらが云つた通り、局外に立つて、大看すれば文章は言語の代表者。それを言語と別立さして、特に一派、談話の依つて起つた意思表示の方法と講究する(御説に曰く、意と達すれば充分なりと)とならば。我々に論とるい。が、或は無益ではなりませんか?

すでに文章を言語の代表者とすれば、談話に遠ゝつた古体の文章を綴つて簡傑明瞭優美高尚と誇るはたゞ〳〵想像的に翫味するばかり。實際すべての人にそれ味を與へるのも我言文一致体の外にはなりますまい。これが、それらすべての味は我が一致派に獨得れ長所と云つた譯です。

言語と文章とを一個の事物とすることは出來ぬ、それでその面を相似寄らすと云つたら自家撞着と言はれました。なせ撞着?おもへば事物と云ふことを解しそこなつて居らるゝかもしれぬ。が、到底二つの事物を混同配合して一事物と造り出すことは、我々人類の力で留めぬ事。それ故似寄らすと云つた——決して別立さするのでもありません。が局外から我を言つたれで。近眼の人達からは、手と足とを取りて形が似ぬと云つて、同じ人のでないと思はれさうな定義かもしれません。

出來ることなら向後御示しをなさる前にはよく〱人の文章を嚙み味つて御覧なさい。これが杉だと云つたらその枝其葉、幹までをよく看察しなさつて、決して其葉に刺があるからと云つて、あとさきも見ずに松だと云ふ樣な論を書かぬが宜しい　我々はそれが大嫌ひ、それ故一々に論理を砕いて先に辨駁をいたしたのです

我々が終に唱道する所は、談話の面と文章の面とを似寄らするそれだけ。たゞそれだけで承服が出來ぬとならば古文の精なり雅文の戈あり（これには多少云ひ分もあるが）或は散漫無統流の大鐵砲でなり共、世俗頑冗百万の強兵を指揮して我々を攻撃しなさい。我々は充分之を防禦してなほ之を降服させる余力があると信じます。それながら世体の不隨意筋！　他の長を容れぬ門閥癖の余流の惡魔が進化の途に横はつて、文明の空氣に毒を吐いて居るとは命でしやうか！　向后しかし有力の反駁を見認めねば再三辨駁はいたさぬかもしれません。その心得でまた論理の入り亂さぬよう着實に口を御開きなさい！

（をとり）

通信問答

金虎樓——㈠「鶏ごろも」は横井也有翁の作、名文です。

山の舍うさぎ——㈠齒ミがき製法は本号にあります。其外に黄色になつた齒を白くする藥の事は以前のいらつめに有りました。御用なら郵券八錢五厘御送りなさい㈡理科大學簡易科の規則は日本橋の丸善にありましやう㈢肺病は遺傳するものです。其豫防法は醫學士竹中成憲氏が一書として著され、本社で賣ります。御用ならば郵券四錢五厘御送りなさい。

柴川柳子——㈠高等教育を受けた婦人は今日の處却つて上流社會に嫁す事が出來ぬやうであるとの御言葉、一應御道理ですが、全くさうでも有りません。一二の外成績を造くる婦人も有りましたが其實教育のある婦人を上流社會で決して今日要さぬ事はありません㈡實に今日の欠点ですが、女學生のため堅い下宿屋は府下にありません。まだ學校の寄宿舍の方が良しいです㈢諸女學校で外國語を教授する理由が分からぬとの御言葉、成る程御尤です。交際のためと云ふでも無し、されとて淺薄な修業で高等外國書を讀めるもので無し、頗る是は考へ物なのです。吾々は女學校に外國語を是非加へる必要といふ事は分りません㈣當雜誌懸賞文の審査以外とあるのは題意の薄い物を言ふのです。まづければ沒にしますが、それ程でも無い、それを審査外とするのです。又〆切期限に後れたのもさうです㈤社員が知つて居るだけを申せば當世文學者の出生地、春のや主人は愛知、さゞのや主人は千葉、依田翁も千葉、南翠氏は伊豫、忍月氏は福岡、美妙齋氏、饗庭氏紅葉山人などは東京です㈥賞品の御評いづれも御尤、實は社中にも其評が有るので、何れ其内に取りかへます。

碧山人——本紙懸賞文は一行廿七字詰に書いたのが宜しいです㈡「オッカナイ」は恐ろしいとの意味です㈢髮にフケの出來るのは逆上のためです㈣江戸紫記者が美妙氏の論文を須摩櫻の制札とは辨慶の故事に本づいたのです。　須摩の櫻を愛し、義經が辨慶に命じ、一枝を伐るものは一指を切るべしと書いて立てさせたそれです㈤東京で紳士に流行する帽子は山高ですが、上のマハリがすこし角張ッて、丸みの無いので一寸見るとシリンドル形と見える方です。其外はメリケン形ッパピロの詩人帽です㈥湖處子の「歸省」は敍事文です、小説ではありません。西洋にはこの類が澤山あります㈦足袋をはいて寢るのは衛生上さして惡い事は無いのですが、其實は不潔の蒸發を鬱閉する譯になります㈧「　」の中には『　』、故に（　）の中には〔　〕などが宜しいでしやう。〔　〕は紅葉風の語界と衝突もしますがさて此外によささうなのは有ますまい。

小説 **大恥辱** 第一編

美妙齋主人新著

來る十二月中に出版

渡邊省亭密畫

全篇の趣向は外人に對ずる日本人の狀況よして憐れむべき少女あり、愛すべき男子あり、憎むべき奸黠なる商人新聞記者石版師戸長紳士あり痛むべき漁夫の薄命あり

一編宛漸次出版

發行 日本橋區本町三丁目 金港堂

少年園に本紙大の大附錄「黑偉人傳」あり

少年園壹册郵税共五錢五厘

東京北豊島郡下駒込村 少年園

名刺 石版 印刷

紫式部

阿茶局

昨年末弊社において名刺石版印刷を極めて廉價に御請合致したところ大に世の喝采を博し倘今年もと御催促の有るため折角の御厚情に從ふ事に決し廣く左記の廉價を以て御注文に應じまする故續々御注文と願ひます最も弊社印刷の石版名刺はいづれも流行の新形です

◎定價

●一度ぞり百枚金貳拾貳錢から上等六拾五錢まで。

●同五十枚金拾四錢から上等四拾五錢まで。

●二度ずり百枚金三拾六錢から上等壹圓拾錢まで。

○但し百枚以上の分、及び二度ぞり百枚以下は印刷しません

○書と入れるば書料一種につき十五錢を加へる事。

○右の價は紙質の良否によるのでそ、印刷に至ッては何れも同じことでそ。

○名刺は注文日から遲くも十日間にこしらへる事。

○注文の方も名刺差送郵税金四錢を申込と同時に御送りなりたい事。

○普通郵便四錢分に對する書留料御送付の上は同じく書留にして差上ぐる事。

○名刺代は何れも前金で、決して加減をせぬ事。

○注文の方は寸法、價格、字体、字の大きさ、其他一切の事を詳細に申送られたい事。

○此名刺印刷も十二部以上のいらつめ豫約家に限一割引の事

明治二十三年十一月

成美社

經世博議

每月二回 五日廿日 刊行

右は嘗て無名無爵の一布衣を以て隱るゝ中西牛郎氏が奮起疾呼する所の新文壇なりその目は則ち政治宗教經濟文學等にして具眼者一たび之を通閱せば國家百年の大計を定むるを得ん

定價表

冊數	期間	定價	市外郵稅共
一冊		六錢	六錢五厘
六冊	三ヶ月	三拾五錢	三拾八錢
十二冊	半ヶ年	六拾九錢	七拾五錢
廿四冊	一ヶ年	壹圓三拾六錢	壹圓四拾八錢

京都市上京區堺町通夷川北

博議社

頓智むすめ

○每月二回發行第二號十月三十一日既發○一部金七錢○十部前金六十五錢○郵稅一部五厘○見本は五厘郵券一枚十四枚と要す○本會の規則書を要せらるゝ方は壹錢郵券一枚を投せらるべし

本誌は頓智に關する論說古今內外話の佳話逸事優美ある小說滑稽小話及正狂詩歌俳句等の文藝をも揭載する北海唯一の面白雜誌あり

發行所　北海道函館區地藏町六十番地

函館頓智會

每月一回（十一日）發行

（速記彙報）

正價一冊八錢　●　十二冊前金九十錢　●　全國無遞送料

十一月十一日發行の速記彙報第二十四冊には**帝國議會**速記試驗詳況、議會速記者に關する事項、速記術と速記器との**決鬪奇談**速記術發表八周年會實況、速記者談話會詳況、日本速記**歷史編纂**論其他論說雜錄寄書問答雜報等數十件を揭ぐ

東京神田區裏神保町一番地

速記彙報發行所

美妙齋主人新著

渡邊省亭密畫

嫁入り支度に **教師三昧**　全壹冊讀切　定價金卅五錢

新作十二番の中

右出板仕候

東京日本橋區通り四丁目角

春陽堂

（遞信省認可）